
タイム・ガール

柚音 朋佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイム・ガール

【Nコード】

N2888M

【作者名】

柚音 朋佳

【あらすじ】

普通の中学3年生・秋川洋二と、ちよつと先の未来が『見える』同級生・山本沙枝。沙枝の持つその特殊な能力を巡って、洋二と仲間達の沙枝を守る戦いが始まる。沙枝の正体とは？ 青春SF中編。私の学校で撮影する自主制作映画の脚本を元にした小説です。実際の脚本とは若干異なります

1（前書き）

もしも、あなたの隣の席に座っている人が、何か特殊な能力を持っているとしたら？

タイム・ガール

教室の大きな窓を開けると、青い初夏の風が舞い込んできた。

その生暖かい風が、近い夏の訪れを教えてくれる。

俺、秋川^{あきかわ}洋二は今年、中学3年生だ。

成績は下の上あたり。彼女なし。

またこの一年も、無難に終わってしまうのだろう……そう思うと、また一つため息をつかずにはいられない。

閉めかけた窓をもう一度大きく開けると、ちょうど吹き込んできた風が心地よかった。

もうすぐ夏休みか。

と、どこからか鼻歌が聞こえてきた。

窓際の席……ちょうど俺が立っているすぐ近くの席に、女子生徒が座っていた。

俺に気付いた女子生徒が、俺を手招く。

「アキ、何ボサーっとしてるのさ」

「うるせえ。好きにボサーっとさせる」

その女子生徒——山本^{やまもと}沙枝は、俺が中学校に入学してから初めてできた友達だった。

お互い初めてできた友達が異性だろうが、そんなことはあまり気にしなかった。

特に恋愛対象としてもお互い見たこともない、普通の関係。

「そういえば次、英語のテスト返しだね」

先週、期末テストを行った。

俺は、誤答でも書いている部分より空欄のほうが多いような答案用

紙を思い出した。

「どう？自信、ある？」

そう言って首を傾げてくる沙枝。

俺は首を横に振ってNOと答える。

すると、つまんないの、と沙枝は口を尖らせた。

沙枝の成績はなかなか良い。常にクラスの平均は上回っている。

「勉強じゃお前には勝てないよ」

「アキも少しは頑張りなさいよ。最初からそうやって諦めないでさ」

「そんなこと言っただってなあ……」

俺は語尾を濁らせ、ため息をついた。またか。

そんなことを喋っているうちに、聞きなれたチャイムが始業を知らせた。

俺はさつと席に戻り、自分の椅子に着席した。

と言っても、先日の席替えで、俺の席は沙枝の隣だった。

適当に集めたテストが、出席番号に関係なく返ってくる。

沙枝がまず取りに行き、自分の机に戻ってうすら笑みを浮かべていた。

この野郎。

そして、突然沙枝はこちらを向いて言った。

「……12点」

「は？」

そうだ、言い忘れていたことがあった。

沙枝は時々、

「あんたの点数だよ。この後のテスト返しの」

「……また、見えたのか」

ふと、数分先の未来が『見える』ことがあるらしい。

誰がそんな非科学的なことを、と言うかもしれないが、これは本当のことだった。

沙枝は明るい顔で言う。

「うん、でもどうせなら、自分の点数見たいよね!」

「ま、俺は得したと言うか絶望したと言うか」

「得したってことにしておけば?」

秋川、と先生が俺を呼ぶ声が聞こえた。

俺はのんびりと返事をし、のろのろと答案を取りにいった。

席に戻って答案を見ると、そこには赤字で『12』としっかりかかれていた。

「ほら、当たったでしょ?」

俺は悔しかった。

小さく「畜生」と呟くと、沙枝に言い返した。

「そういうお前は何点なんだよ」

沙枝はつんと澄ました顔で、90と書かれた答案を俺の顔面でひらひらさせた。

やつぱり腹の立つ奴だ。

「お前、テストの設問が見えてましたーみたいな、そういうオチか」
少しイライラしながら俺は聞いてやる。

すると、12点を横目に見ながらそいつはさらに頭にくる返答をする。

「これは違いますウゝ私の実力ですウゝあんたがバカなだけですウゝ」

「お前えええ」

俺は拳を握り締める。

沙枝が男子ならば絶対に殴っていたところだ。

ここで怒っていても仕方ないので、俺は怒りをため息にしてはききます。

「いいなあ、お前はそういう能力があつて。…俺も欲しいよ、そんな便利な…」

「そんなことないよ!」

沙枝がいきなり立ち上がって、声を荒げた。

俺はびっくりして思わず、うつむいた沙枝を見上げた。

「私は確かに未来が『見える』けど…」

沙枝の拳に入る力が強くなる。

「『見える』だけで、未来を変えられるわけじゃない…」

俺はただ一言、「ごめん」と謝ることしかできなかった。地雷を踏んでしまったか。

沙枝はそんな俺に「アキが謝ることないよ」と笑ってくれた。

「やーっほー！沙枝、どうだった？テストはっ！」

いきなり横から、女子生徒が飛び込んできた。

何だ、コイツ。

見慣れない…いや、校内で今まで何度か見かけたことがある程度だが、名前までは知らない女。

沙枝は「90点だよ」と優しくそいつの興奮をいさめた。

そいつは机に投げ出された俺の答案を見るなり、

「うつわ！何コイツ、12点とかヘッボ！ウケるゝ！！」

沙枝以上に腹の立つ女の登場だ。

こういう女とは仲良くなれそうにない。

「アキ、こいつは中村春香。なかむらはるか私と部活一緒なんだよ」

沙枝は春香に俺のことを紹介すると、俺の前に仁王立ちした。何だ。

「よろしく、12点クン」

「黙れ。お前は何点なんだ」

春香はフンと不敵な笑みを浮かべると、バツと自分の答案を俺の顔面に突き出した。

「見よ！この光り輝く赤ペンの軌跡をッ！！」

俺の目に飛び込んできたのは、89に見える『赤ペンの軌跡』。なんて奴だ。

付き合いきれないな。こいつらとは。

「沙枝には一点及ばなかったけど、まずまずでしょ？やっぱ沙枝は頭いいからね」

「予復習の賜物だよ。アキもそれくらい勉強すれば？」

「うるせえ！」

と、俺の視界にもう一人、女子生徒の姿が入った。

あまのゆい
天野唯。学年トップの成績を持つケタ違いの女だ。

「あいつは今回もトップか……」

「え、なにに、アキって唯みたいのがタイプなの？」

「バ、バカ！ あんな地味でネクラな奴、俺の守備範囲外だっつーの！」

唯は必要以上に周りとコミュニケーションをとらない。

それこそ授業には休まずに参加するが、挙手することは決してない。存在感もさほど感じたことはない。

身体が細く、何も喋らない姿は気が弱そうで引っ込み思案のようですらある。

唯がいじめに合わないのか不思議なくらいだ。

ふと、俺が唯に視線を戻すと、唯が見つめ返してきた。

何だよ。

俺に何か伝えたいこともあるのか。

「……」

唯の口が動いた。

しかし、雑音にかき消され声は聞こえない。

あいにく俺は読唇術なんか習っちゃいない。

俺はわざとらしく首を傾げると、唯を視界から外した。

そうして、全ての授業と補習も終わり、帰り道。

部活動なんてもうとくに引退した。

俺達は学校から我が家まで徒歩で登下校している。

テストの成績が悪かった俺と、同じく赤点スレスレの親友・たにみきゆ谷崎悠也は、担任教師の補習を受けた。

が、その補習に何故か沙枝と春香が付き合ってきて、四人仲良く一緒に家路に着くこととなった。

真っ赤な夕焼けが眩しいほどに美しい。
というか眩しい。

前列に沙枝と春香が並んで喋っていて、男性陣は後ろでぼそぼそと他愛のない話をする。

「お前はいいよなあ」

聞き覚えのあるフレーズで会話が始まった。

俺が沙枝に発して地雷を踏んだ台詞だ。

「何がだよ」

「ああいう奴と友達で、さ」

言いながら谷崎が、顎の先で沙枝を指す。

「まあ、退屈はしないけどな……」

「ふふ、お前と親友でよかったよ」

「は？」

いきなり素っ頓狂なことを言い出す。

これが青春ドラマのラストシーンでもあれば、絵になる台詞なんだろうが、今はそんな状況でもなんでもない。

「俺のこんなすぐ近くに非日常を生きる人間がいたなんて、俺はなんて幸運なんだ！……ってコト」

谷崎はミュージカルのように大げさに両腕を振ってみせた。

俺はせいぜい両腕を避けながらため息をつく。本日何回目か、誰かカウントしてくれ。

「あいつには興味が尽きないわ」

「このオカルトオタクが」

俺の精一杯のイヤミを、谷崎はかるくかわして身を乗り出す。

「でもさ、お前だって気になるだろ？なんで沙枝ちゃんにあんな能力があるのか」

「……気にならなくはないけど、気にしたところでどうにもならないだろ。『見える』んだから仕方がない、とかなんとか言ってたし」

「そこをなんとか説明すんのが楽しいんだろ！！ロマンの欠片もない奴だな」

「なくて結構」

すると谷崎は突然ぱんと手を叩いて名案だとしても言うように目を輝かせた。

「そうだ！今年の夏休みの自由研究。沙枝ちゃんっていうのはどう？」

「お前なあ……」

「一昨年が交霊実験、去年がオーパーツ研究、そして今年は未来予知能力の大研究！いい流れだ」

谷崎のキラキラは止まらない。

俺はあえて冷めた態度をとる。

ここで無理にテンションを合わせようものなら、本当に沙枝を自由研究ってことになりかねない。

「俺、パス」

「えー、面白そうなのにな。アキちゃんノリ悪い」

オカマのように身をクネクネさせる谷崎。

この状態を一言で表すなら……

「きしよい」

「うえー」

「そんな下らない事考えてる暇があるなら、勉強しろ。工業高校行くのだって試験が必要なんだぞ」

そう言つてふつと谷崎のほうを見ると、すっかり肩を落としていたかに見えたそいつが、勘ぐるようにこつちを覗き込んできた。

「そんなに沙枝ちゃんを俺に研究させるの嫌なの？…もしかしてアキって沙枝ちゃんのことが……」

「それはない！」

俺は谷崎の頭をポカリと小突いた。

しかし、全然気にならないというわけではない。

そういえば俺は、沙枝に『見える』理由を聞いたことがなかった。というか、聞いても適当にごまかされ、教えてくれなかった。

その上、中学入学と同時に引っ越してきたとかで、誰もそれ以前の

沙枝を知らない。

知りたかった。沙枝のことが。
やはり夕日が眩しい。

【続く】

1 (後書き)

2 に続きます。

そうして、沙枝のことを考えながら学校生活を送っていたある日の放課後。

俺は何の気なしに、隣の席で探し物をする沙枝を眺めていた。

なんのことはない。「小学校どこだった？」とか、聞くだけでいい。それなのに、どうしてもこうも、聞けずにいる自分がいるんだろう。

…聞いてはいけないような気がする。

もし聞いてしまったら、何かが壊れてしまう、そんな気がする。

沙枝の物言わぬ背中が、全てを拒絶しているような気さえして。

俺は喉の奥から絞り出すように、ぎこちなく言葉を発した。

「なあ、沙枝…」

なんで話しかけるだけでこんなに緊張するんだろう。

「ん？何、アキ」

沙枝は俺の気持ちとは正反対に、澄み切った笑顔で答えた。
瞳がキラキラと輝いている…ように見える。

いつものことだ。

俺が変に意識したらおかしいだろうが。

何を考えてるんだ、全く。

「その…お前、」

しかし、その次が発せられることはなく、それは俺の目の前を覆った人影に遮られた。

一瞬の出来事だった。

黒い。

どう見てもこの学校の制服じゃない。

真っ黒でまるで喪服のようですらある。

私服なんだろうか。

でも教師にも見えない。ただ漠然と体の細さが女だと分かる程度だ。
「ちよつといい？」

そう沙枝に聞いた…いや、呟いたと言ったほうが妥当だろうが、そんなことはどうでもいい。

そいつは沙枝の手首を強引に掴むと、沙枝がもぐくのを構わずに走っていった。

「ちよつ、沙枝!!」

俺は何故か駆け出していた。

沙枝を追っかける理由？そんなもん俺に聞かないでくれ。
俺が知るわけないだろ。

「アキ、何処行くの？ねえ、アキ？」

教室を出るとき、好奇心旺盛な谷崎がついてきたが、気にしている暇はない。

俺の脚が勝手に動く。俺を走らせる。

不思議と疲れは感じない。

その黒い女は沙枝の手を引いたまま、俺を凌駕する速さで走っていく。

ほとんど沙枝が引きずられていつていようだ。

黒い女はどこに向かっているのだろう。

突然沙枝がこちらを振り向いて叫んだ。

「アキ!! 来ないで!! 来ちゃだめ!!」

「沙枝!!」

沙枝は半泣きに叫び続けた。

俺はふと止まってしまった。すると、後続の谷崎が俺の背中に激突する。

「うおっ！痛ってえ…何なのさ急に止まって…」

「……」

動きを止めてからどつと疲れが押し寄せてきて、思わず膝を着いた。
はあはあと荒い息をする俺に、谷崎が肩を叩いてきた。

俺は振り返ることも忘れて、がっくりと肩を落とし、うつむいた。

「何なんだよ、アキ」

「サ、エ…」

俺は一言呟き、息を整えるとまた、ぱつと走り出した。階段を転がるように下りる。

もう既にあの二人の姿は見えなくなっていた。

俺は何故か、沙枝を必死になって探していた。

沙枝は何処だ。

あの女は沙枝を何処に連れて行っただ。

「いやあああああああああああああ!!!」

「沙枝!？」

沙枝の悲鳴だ。

全てを拒絶する悲鳴。

それは、ちょうど走って50メートルくらいか、理科準備室から聞こえてきたような気がした。

理科準備室の扉は、いつものようにきつちりと閉じられている。もしかしたら、内側から鍵をかけているのかもしれない。

俺はなおもついてくる谷崎とともに理科準備室の前に走り出た。

「ここから聞こえてきた…よね？」

谷崎が言い終えたか終えないかのところで、また中から声が。

「やめて…何するの…」

沙枝だ。

俺は力任せに扉を叩いた。

「沙枝!沙枝!!!いるのか!!!」

「だめだよ…!アキ…!」

「沙枝。お前を殺す時が来た」

凜と静かに響く声は、多分あの女のものだろう。

「自分の立場を分かっているのか?我々が何故お前を始末しなかつ

たか分らないのか」

「でも、でも…死にたくないよ！前と違って力も制御できてるから…だからお願い」

立場？始末？制御？

何の話だ。

俺は中に入ろうとしたがドアが開かない。

やはり内鍵か。

俺は谷崎と協力して、ドアを体当たりで破ることにした。

ドン、と身体をぶつけるたびに肩が痛くなる。

「ダメだよ！！アキ、来ないで！来たら、ダメになっちゃうよ…！」

ダメニナツチャウ？

音だけが俺の耳を通り過ぎていった。

ダメになるうがなんだろうが、今俺がこうしなきゃ、お前は死ぬんだろ！！

何度か身体をぶつけたところで、ドカッとドアの蝶番が壊れ、俺達は部屋の中に倒れこんだ。

「アキ！！」

女は沙枝の眉間につきつけていた銃を、倒れたままの俺のこめかみに向けた。

「くっ…」

「余計な真似を…」

「アキ！」

女は舌打ちをして、リボルバーのシリンダーをまわした。

谷崎の叫び声も聞こえる。

俺、死ぬのか。

何故かモデルガンには見えなかった。実銃なんて見たことないのに。死ぬって何なんだろう。俺はそんなことを考えて目を閉じた。死ぬなら、痛くない程度に…。

どさり。

「なっ！！」

あの女の声だ。

何があったんだ。俺は生きてゐる、らしいな。

ゆっくり目を開けると、俺の目の前に、手^がが転がっている。

手？…手にしか見えない。

手だけが転がっているのに、血が一滴もたれていない？

何故だ。

俺はゆっくり上体を起こすと、俺のすぐ横に、刀^がが伸びていた。

女の手が切り落とされていた。

俺は状況が整理できないまま、その刀の元を辿った。

その刀を握っていたのは…

2 (後書き)

次回で完結します。

3 (前書き)

ちょー！！

思ったより長かったです。すいません。

次こそは…。

ゆっくり目を開けると、俺の目の前に、…手が転がっている。
手?…手にしか見えない。

手だけが転がっているのに、血が一滴もたれていない?
何故だ。

俺はゆっくり上体を起こすと、俺のすぐ横に、刀が伸びていた。
女の手が切り落とされていた。

俺は状況が整理できないまま、その刀の元を辿った。
その刀を握っていたのは…

「見つけましたよ、礼^{レイ}」

「ユ、イ…?。唯!？」

刃先がゆらりと煌いた。

唯…だよな?

さして存在を自覚したこともない唯が…。

俺は、唯が今日のテスト返しのように俺に何かを呟いたことを思い出した。

あの時に、何か…。

「警告はしたはずですよ。秋川君」

「分かるかつーの!」

俺は身体を起こして立ち上がると、唯が女を取り押さえている間に
沙枝の元に駆け寄った。

沙枝を立たせると、沙枝の肩についた埃を払った。

「アキ…何で来たの!来ちゃダメって…!!」

沙枝は俺のシャツの裾を掴んだまま、ゆるゆると力が抜けてその場

に座り込んだ。

沙枝は泣いていた。

俺も沙枝と視線を合わせる。

俺は何も言わなかった。

かける言葉が見つからなかった。

「この…」

礼と呼ばれた女はゆっくりと立ち上がって沙枝をキッと睨んだ。

「試作品の分際で…っ」

「やめてえ!!」

沙枝が耳を塞いで頭を振った。

こんな沙枝は見たことがなかった。

俺は礼の方を見て、あろうことか呟いてしまった。

「試作品…?」

「何も知らないようだな…知らなくて当然か」

礼は切り落とされた手と、リボルバーを拾った。

リボルバーを口にくわえ、外れた手を片方の手でまた、手首につけた。

カチャリ、と金属が噛み合う音がした後、リボルバーを握った。

その直後、唯が刀の刃先を礼の後頭部に突きつけた。

「礼！それ以上動けば…」

唯が叫んだ。

「私が死んだら困るんだろう?」

礼は突きつけられた刃先を後ろ手に握った。

そして、今度は俺を真っ直ぐに見つめた。

人間のように見える。

だが、こいつは手を斬られても血を一滴もたらさなかった。
つまり、人間じゃないってコトなのか。

礼と目が合った。

礼の瞳孔が電子音を立てる。

何かの漫画で読んだっけな。カメラアイ、って奴なのか。

礼は淡々と話し始めた。

沙枝は頭を抱えてうずくまり、震えていた。

「こいつは我々の組織が作った、非戦闘型サイボーグのテストタイプ…コードネームは”サエ”だ」

「礼…貴様…！」

礼は構うことなく話し続ける。

「体内にタイムマシンを埋め込まれ、先の未来を自在に見る事ができる能力を持ったサイボーグになる筈だった。だが所詮サエは試作品…期待通りの動きはしなかった」

「やめなさい…礼！」

「使えない…だから破棄する。もともと今の社会には存在してはならない物だ」

礼は唯の方を向いた。

「全て本当のことだ。お前も知っていただろう？」

「……」

礼は尚も畳み掛けるように言った。

「お前は人間じゃない」

無機質な声が、残酷に響く。

俺は沙枝に向き直った。

沙枝は泣いて肩を小さく震わせながら俺を見上げた。
涙でグズグズになった顔だ。

「ごめんね…アキ…」

「沙枝…」

谷崎も沙枝の近くに寄った。
心配そうに沙枝を覗き込む。

「沙枝ちゃん…」

「ごめんね…ごめんね…！！」

沙枝はまた泣き崩れた。

唯は一瞬の隙を突いて、刀の柄に仕込んだ小型のナイフで、礼の肩

を刺した。

そのはずみに礼はつかんでいた唯の刀を離し、その場に尻餅をつく。唯がその上に圧し掛かり、礼の腕を掴んで押さえつけると、俺たちの方を向いた。

「サエを持つて早く逃げて下さい！」

持つて、という言い方が気になったが、俺は後ろに谷崎がついて来るのを確認しながら、沙枝の手を引いて走った。

走りながら、後ろのほうで取っ組み合う物音が聞こえた。

随分走った気がする。俺たちは人^{ひと}気の^けない、薄暗い階段下の物置にやっと腰を下ろした。

俺たち三人は息を荒げ、壁にもたれて座り込んだ。

少し息を整えると、沙枝が谷崎のワイシャツの肩を掴んで倒れこみ、すすり泣いた。

「沙枝ちゃん…大丈夫？」

「大丈夫に見えるのかよ、あんな事があって」

「うつ、つ……うえっ…」

顔を伏せたままの沙枝。

こんな弱気な沙枝が、沙枝に見えない。

姿形だけが、沙枝だ。

沙枝はもつとバカみたいにムカツク奴で、バカみたいに明るくて、バカみたいに元気な奴なのに。

俺はじれったくなって、沙枝の肩を掴んだ。

「沙枝！！しっかりしろ！！」

沙枝の肩を強く揺する。

突然、ふつと沙枝の潤んだ瞳が俺を見上げてきた。

「どうして…？どうして助けたの！？」

「沙枝…」

「ずっと秘密でいれば、こんなことにはならなかったんだよ！？」

沙枝は叫び続ける。

「アキも谷崎くんも！あの組織と関わったから…ずっと命を狙われることになる」

俺は銃口を突きつけられたときの感覚を思い出した。

本気で死を覚悟した瞬間、胸に走る息苦しいまでの恐怖が甦る。

「私一人が死ねば済むことだったのに！」

そこまで言っと、沙枝はまた顔を伏せてしまった。

「私…人間じゃないんだよ？試作品のポンコツ改造人間」

尚もぐずぐずと何かを言おうとする沙枝が、俺は一瞬本気で腹立たしくなった。

俺は沙枝の肩を掴む手に力を込めて、もう一度強く揺すった。

「お前は沙枝だ！」

「アキ…」

谷崎も真剣な顔をする。

「お前が何だろうと、お前は俺達の知ってる沙枝だ！違うのかよ！
！沙枝！！！」

力の限り叫んだ。

閉ざしかかった沙枝の心に、少しでも届くように。

沙枝は泣いていた。

少し、叫びすぎたか。

うずくまった沙枝の肩に手を置いて、谷崎が優しく言った。

「何があっても俺達は沙枝を信じる。当然でしょ？」

友達なんだからさ、と谷崎は精一杯微笑みかける。

今の俺にはできない芸当だな。

「谷崎くん…アキ…」

沙枝が制服の袖で涙を拭った。

その時、

コン、コン。

物置のドアを叩く音がした。

俺たちはビクリと動きを止めたが、ドアの向こうから唯の声が聞こえてきた。

「ここ、ですよね…？」

ガチャリと音をたててドアが開けられた。

壁とドアの隙間をすり抜けてきたのは、やはり唯だった。

「唯っ…！！」

沙枝は唯に飛びつくように縋り付き、肩を震わせて泣きついた。

涙ももう枯れたのか、泣き声だけが耳に響く。

「沙枝さん、安心してください」

唯はそう優しく言って、涙でグズグズになった沙枝を伏せるように手のひらをそつと乗せた。

すると、しばらくしないうちに、沙枝の激しかった肩の上下が緩やかになり、やがて表情も安らかになった。

まるで眠っているような…そんな顔だ。

「沙枝さんの脳神経系にはたらきかけ、精神状態を落ち着かせています」

沙枝のパニックが治まったところで、俺たちもやっと一息つくことができた。

唯はしばらく沙枝を見つめていたが、沙枝が落ち着くと、俺たちのほうを向いた。

「…あなた達にお話があります」

真剣な面持ちだった。

「こいつのことだろ…」

俺は、寝ているような沙枝を顎で指し示した。

「はい…聞いてしまったからには、お話ししなければなりません」

唯は自分の不始末を悔やむように、俯いた。

しかし、すぐに決心を決めたように息を吸い込み、また正面を向いた。

「礼の言ったことは全て本当です。…沙枝さんは改造人間なんです」
俺達は唯をしっかりと見つめた。

「私は、ある組織から送り込まれたスパイです。この学校には他にも、私の仲間達が潜伏していて、沙枝さんを監視していました」

「監視？」

「はい…礼の組織は沙枝さんをこの中学校に置き、サイボーグが通常の人間と接触した場合の実験を行っていました。私たちは機を見て沙枝さんを救出するため監視していたのです」

「実験…」

谷崎が自分の顎に触れる。

「監視していたつもりでしたが…ああして時々、礼たちと接触していたなんて…」

「あの…ひとつ聞いていいかな？」

谷崎が手を挙げた。

「礼つてのも…サイボーグなの？」

「ええ、彼女の組織は、所属する全ての者が改造手術を受けています」

だから、手が斬りおとされても血の一滴も見えなかったのか。

「よく聞いて下さい」

唯の声に、俯きかけていた俺達がふっと顔を上げた。

そして、耳をそばだてた。

「こうなってしまった以上、沙枝さんは私たちの組織が保護します」

「保護…って…？」

「申し訳ありませんが…あなた達とは、もう一生会わせることはできません。私も、沙枝さんも」

「なっ…!!」

俺はつい声を荒げた。

一生？会えない？

そんなこと考えたこともなかった。

いつも、学校に行けばこいつがいる。

でも、明日学校に行ってもこいつはいない。

明後日も、その後も、卒業しても、ずっと…。

「沙枝さんをここではない場所に移動させなければならぬのです
…どうかご理解ください」

「沙枝…」

沙枝を見つめた。
まだ眠っている。

3 (後書き)

まださらに次話に続きます。すいません><

唯は沙枝の目元から手をそつと下ろすと、沙枝がまたゆっくりと目を開けた。

「唯…私、どうなっちゃうのかな」

「ご心配なく…あなたは私たちが責任を持って守ります」

「俺も、守るよ」

谷崎が乗り出した。

ここまで関わっておいて逃げる奴なんて、いるのか？

答えは反語だ。

「当たり前だろ」

俺は沙枝に笑いかけた。

沙枝は少し安心したらしく、涙の痕までついた頬を二、三回軽く掻いた。

唯は沙枝の回復を確認すると、立ち上がり、閉まったままのドアの方を向いた。

「では、まずここを出ましよう」

「うん」

沙枝が立ち上がり、俺と谷崎もそれに続いた。

沙枝は、この一件がひと段落ついた後、二度と会えなくなることは知らない。

だから少しでも明るい顔がしていられるんだ。

せめて俺達も、と俺と谷崎の間で暗黙の会話が流れた。

唯が慎重にドアを開き、外に転がり出た。

「!？」

「…何だよ、コレ…」

物置の外の床を、白い煙が徘徊していた。

火事でも起きたのか。

いや…火事の煙って、こんなに白かったっけ…？

「…催眠ガス！」

「！」

唯が気づくと、俺達は反射的に口を押さえた。

しかし、唯はすぐにその手を制し、周囲を見渡す。

「この高さなら…大丈夫です。もう蔓延しきった後なんでしょう」

「じゃあ、今学校にいる連中は…」

「全員夢の中、ってこと？」

唯は静かに頷いた。

「これからどうするの、アキ」

沙枝は心配そうに俺に聞いた。

俺が知るわけないだろ！と言ってしまいたいが、そんな無責任なこととは言っていられない。

「屋上に行こう」

「え？」

谷崎が階段を見つめた。

「逃げるなら、裏口とか、昇降口とか…他にあるだろ!？」

「多分、敵もそこは包囲してるんじゃないかな?…なんとなく、だけど」

「屋上に逃げてどうするの?」

「それは…」

谷崎が口をつぐむと、唯が続けた。

「へりを用意しておきましょう。仲間に通信します」

へり、か…。

近くで拜んだことはないな。

あまりに突飛な世界だ。

唯が小さな通信機を取り出し、アンテナを伸ばすと、ぼそりと何かをつぶやいた。

多分、そういう旨の言葉なのだろうな。

「行きましょう」

唯は、通信機のアンテナをしまうと、階段を駆け上がっていった。カツカツと音を立てて走る唯の背中を俺達は精一杯ついていった。後続の沙枝が少し息切れしかけている。

谷崎はまだまだ行ける、という表情だ。

俺は沙枝の制服の袖を引っ張りながら走っていた。

しかし、沙枝のスピードがだんだん落ちてくる。

俺は、沙枝の手首をつかんだ。

夏服だから、そこは素肌だ。

沙枝の体温がうつすら伝わってくる。

普通の人間じゃないか。血も通ってる、体温もある、感情もある・・。

それなのに、人間じゃない？

違う。

俺は沙枝を今となっても、ただの人間だと思ってる。

友達だと思ってる。

友達なんだ。

誰がなんと言おうとも、沙枝は人間だ。

瞬間、唯の肩を銃弾が掠めた。

大きな銃声が響いた。

「そこを動かくなっ！」

見上げると、人影があった。

小柄な人影だ。

でも、礼じゃないことだけはなんとなく分かる。

声も違う。

それが背にした窓からの光に目を細めつつ、俺達はその人影に目を

凝らした。

「次は撃つんだから！」

マシンガンだろうか？とても大きな銃だ。

目が慣れてきたころ、そいつの格好がよく見えてきた。

…ガスマスクだ。

そいつはガスマスクとしか形容しようのないものを顔全体にかぶっていた。

制服は…この学校の子女の制服…沙枝と同じものだった。

なんとなく、見たことある髪型のような気もするし、なんとなく聴いたことがある声だと思った。

そいつは構えたマシンガンを下ろした。

「沙枝、あんたこんな所にいたんだね」

そう言いながら、そいつはガスマスクを外して、投げ捨てた。

見たことがある。

言葉を交わしたこともある。

いけ好かない奴だったことも覚えてる。

「…春香？春香！！？」

叫んだのは沙枝だった。

そうだ、中村だ。

そいつは中村だった。

「春香！あんた…何やってんの！？」

「見て分かるでしょー、あんたを破壊するために来たの」

中村はフン、と嘲笑した。

「ああ、12点クンも一緒なのね、関係ないけどっ」

中村はもう一度マシンガンを構えると、沙枝に向けて引き金を引いた。

マシンガン特有の銃声がする。

大きくて耳障りな騒音だ。

唯がさつと身を引き、俺達をかばうように俺達のほうを向いた。

相手も狙いを定めるのが苦手と見える。腕が銃に持っていかれてい

るような状態だった。

しばらくすると、弾切れを知らせる乾いた音が鳴る。

俺達は間一髪で銃弾の雨から逃れた。唯も無事だ。

中村はちつと舌打ちをすると、マガジンを取り替えようとした。

「沙枝さんのことは諦めなさい、そして礼に伝えて。『帰りなさい』と」

唯が冷静に声を発する。

中村は空になったマガジンを捨て、怒鳴った。

「はあ！？ワケ分かんない！今そこにあるのに、どうして帰らなきゃいけないの！」

弾が充填されたマガジンに付け替え、中村はさらに声を荒げる。

「あんたこそ、礼を何とかしようとか、まだそういう無駄なこと考えてるワケ？」

「無駄なこと……？」

「そう！無駄に決まってるじゃない、絶対に礼は裏切らない。心から私達の組織に忠誠を誓ってるもの」

「……」

「あんたこそ早く戻ってきなさいよ、まあ、碌な扱いされないと思うけど」

「戻る気なんてありません！絶対に……」

「じゃああんたもここで死ねばっ！」

中村がマシンガンを構えた。

今度こそ、奴は俺達を撃つだろう。

逃げればよかったと後悔するのはもう遅い。

足が動かない。

それに、みんな体力も等しく消耗しているんだし、逃げ切れる自信もなかった。

中村と唯のやり取りがなんとなく気にはなったのだが、そんなことを気にしている暇はない。

しかし、その緊張を破って、沙枝が叫んだ。

「春香！どうして？何で春香がそこにいるの！？」

「だから言ったでしょ、あんたを壊すためだつてば」

「どうして？私を壊すの？」

「どうして、つて…そんなの決まってるじゃないの」

「え…？」

フフ、と中村が含み笑いをする。

「中学校であんたと出会うところから今まで、仲良しこよしも全部お芝居。ホント疲れたんだからね」

「やめてよ…春香…！」

「友達のフリして近づいて、上からの命令を忠実にこなしてれば、報酬がもらえるの」

「黙りなさい！」

唯が叫ぶ。

そして、刀を構えて中村の方に駆け上がった。

「…あつ！」

沙枝が叫ぶ。

「春香！春香ア…！」

目に涙をためている。

「やめてえ…！唯ッ…！」

何に泣き叫んでいるのかは、なんとなく分かった。

俺は、初めて会話したときの中村を思い出した。

いけ好かない奴ではあったけど、…。

唯も怒りに任せて刀を振るっているように見える。

中村は至近距離で発砲することにためらい、マシンガンで唯の刀を受け止めていた。

いったん跳ね返して、後ろに下がったところで、中村がマシンガンを発砲した。

しかし、銃弾は唯の耳の横を通過し、壁にめり込んだ。

唯はそのまま突っ込んでいき、中村の懷に飛び込む。

「春香アア…！」

沙枝の叫びは、聞こえていないようだった。

唯はそのまま刀を突き出し、その切っ先は、中村の胸を貫いた。
グシャリ、と鉄が潰れるような音がした。

ああ、春香も…。

「あ、あ、あ…はる、か…!!」

沙枝は動かなくなった春香に駆け寄り、また、泣いた。
そうなんだろう？ 沙枝。

これと同じ光景が見えたんだろう？

唯が負けるなんて信じたくなかった。でも、クラスメイトが死んでいく姿も見たくなかった。

唯は肩で息をしていた。

まるで一思いに殺人を犯してしまった後のような感じだ。

谷崎が泣き叫ぶ沙枝の肩に手を置いた。

唯は息を整えると、刀を鞘に納め、上を見上げた。

「先に…行きましょう」

「…うん」

沙枝は分かっていた。

今は、屋上に走るべきだということを。

俺達はさらに階段を駆け上がる。

…友達ってなんなんだ。

春香も結局は、敵方の改造人間だった。

春香は、本当に沙枝のことを友達と思っていたのだったのだろうか。

目の錯覚だと思っただが、俺には、沙枝と言葉を交わしていた春香の目が微妙に潤んでいるように見えた。

改造人間が泣くのかどうかは知らないが、もしそうなのだとしたら…？

…いや、今はそんなことを考えている場合じゃない、か…。

4 (後書き)

もう少し続きます

鍵がかかった屋上のドアを、俺と谷崎で蹴破った。しかし、屋上で待っていたのはへりじゃなかった。

「礼…」

礼はあの時と変わらず、拳銃をまっすぐに構えて、こちらを見つめていた。

「任務ご苦労だったな。ここまで連れてきてくれて恩に着る」

「え？…」

俺達の中に、動じない人間が一人。

「う、嘘だろ…？」

谷崎。

谷崎は目を一瞬つぶり、済まない、と言うように歯を食いしばった。

「谷崎！お前…っ」

「ゴメンな。…アキ」

「谷崎くん…」

谷崎は沙枝の手を引いて、礼の方に歩いていった。

沙枝はもう何がなんだか分からない。抵抗すらできなかった。

「谷、崎…」

俺は膝を地面にがつくりとついた。

春香にマシンガンを連射されたときの沙枝の気持ちって、きっとこんななんだっただろうな…。

俺は言葉にできない絶望感と喪失感に襲われた。

親友、じゃなかったのか？谷崎！！

「谷崎イー！！」

俺は腹の底から声を張り上げる。

叫ぶ。

涙が頬を伝う。

礼は沙枝の首を左腕で抱え込むと、谷崎に拳銃を向けた。

まさか…？

やめてくれ。

谷崎も所詮使い捨てだっていうのか。

谷崎は俯いたままだ。

こうなることを覚悟していたんだろうな。

「アキ」

谷崎が声を掛けた。

「谷崎！なんで…なんでお前もそっちなんだよー！！」

「ごめん。…でもさ」

「……」

「お前らと過ごしてた時間は、…とても楽しかった」

「谷崎…」

「だから、俺…」

後ろで、礼がシリンドーを回したのが分かった。

沙枝は顔を逸らして目をつぶった。

「谷崎！伏せろー！！」

「お前と……」

谷崎は聞こうとしない。

俺も目をつぶりたかったが、ここで目を逸らしたら、谷崎が悲しむ。そう思った。

「お前と、出会えてよかった」

銃声がした。

谷崎ががっくりと前に倒れた。

胸の中心に、銃で撃たれた穴が開いている。

血が流れないところを見ると、こいつも…。

「谷…崎…」

谷崎は、笑っていた。

お前って奴は…馬鹿野郎だ…。

お前には悪いが、俺は、沙枝を取り戻さなきゃならない。

俺は、一度は地に着いた膝を立て、まっすぐに立ち上がった。

頬に張り付いたままの涙の雫を拭う。

「礼… あんただけは絶対に許せねえ」

「…… フン、所詮谷崎悠也も我々の尖兵に過ぎない。使い捨てて何が悪い」

「…… 俺はもう、いろんなものを失いすぎた… だから」

沙枝の目をまっすぐに見つめた。

「沙枝だけは、絶対に守ってやる」

唯が刀を構え直した。

唯は今までのやりとりを、じつと静観していた。

その刀が、先ほどより重そうに感じるのは、こいつなりの責任感だろうか。

「いずれ沙枝は死ぬ。今さら遅い」

と、俺は谷崎の制服から、黒光りするものが覗いているのが見えた。谷崎も拳銃を持っていたんだな。

俺は谷崎の元に駆け寄り、「少し借りるぜ」と呟いて胸のホルスタ―から拳銃を抜き取った。

本物の銃は、やはりモデルガンと違って少し重い。

護身用なのだろうか、礼が手にしている物よりは小さく、華奢な銃身だった。

「秋川君」

「ん？」

唯が不意に声を掛けた。

「私が隙を作ったら、その間に礼を撃つて下さい。… できますか」

「できなきゃいけないんだろ」

「はい」

「分かってるさ」

「胸の中心にあるコアを撃ち抜けば、一撃で壊すことが可能です」

「コア…」

俺は礼の胸の中心にむけて銃を構えた。

唯は刀の構えを微調整しながら、礼に向き直った。

礼は相変わらずの冷酷な瞳で、不敵に笑っていた。

「礼…私はもう、あなたの妹でも何でもありません」

「…まだそんな事にこだわっていたのか。何度もいっただろう、無駄だと」

「妹…」

初耳だ。

ああ、あの時に中村と話していたことは、そういう事だったんだな…。

俺の脳内で話が全てつながっていく。

つまり、礼と唯は姉妹であり、元は同じ組織に所属していた。

そして唯が裏切って組織を出た…そして、唯は礼も悪の道から救い出すために、沙枝を守る傍ら礼を探していた。

そういう事だったんだろう。

しかし、もう唯は見切りをつけた。

礼という過去と決別することを決めたんだ。

俺は谷崎の銃のグリップを握り締めた。

「駄目だよ！アキ…！やめて…！」

沙枝が叫んだ。

「どんな未来も…変えられないんだ…」

沙枝はまた泣きじゃくった。

俺が死ぬ未来でも見たんだろう。

「沙枝、今日はお前の未来予報が外れる日だ」

俺は沙枝を安心させたかった。

「絶対に俺は生きて、お前を助ける」

口が勝手に動く。

「未来なんて、変えるためにあるんだからな」

礼は銃を唯に向け、シリンダーを回した。

唯は刀を構え、礼に向かって突進した。

「無駄だ！」

礼は一発発砲した。

唯は避けようとせずに肩に銃弾を受けた。
それでも唯は走っていく。

きつと唯も改造人間なんだろう。

素早くもう一発、と礼は構わず発砲する。

次は唯の首をに銃弾が掠めていった。

「アキい！！」

沙枝が叫んだ。

唯の刀が、礼の肩に食い込み、肩を斬りおとす。

礼はりボルバーを肩ごと取り落とした。

俺は引き金に指を掛けた。

「秋川君！」

唯が促す。

その瞬間唯が沙枝を抱えて身を後方に引く。

「くっ！」

俺は引き金を引いた。

目をしっかりと見開いた。

谷崎の銃から放たれた銃弾は、……礼の胸を貫いた。

礼は倒れて動かなくなった。

唯は、沙枝を俺に預けると、礼の元に歩み寄り、開いたままの目を閉じてやった。

「せめて、安らかに……姉さん」

小さく呟いた。

沙枝は俺を見た。

「ポンコツだから、かな」

「え？」

「私の予見、外れちゃった」

真っ直ぐに見つめてくる瞳が、なんとなく怖いような、可愛いような。
「アキ」

「うん？」

「私達も…ここで別れだね」

遠くでヘリの音が聞こえた。

唯が呼んだヘリがこちらに向かってくるんだろう。

ヘリが到着したら、沙枝とも別れなければならない。永遠に。

「…そうだな」

「…」

「何だよ、寂しいのか？」

「…うん」

正直、俺もだ。

沙枝の笑顔が見られなくなることを思えば、やっぱり寂しい。

「ねえ、アキ」

「ん？」

「私、アキのこと…」

ヘリが俺達の上空に来て、降下を始めた。

プロペラが回る轟音にかき消され、その後が続いた声は聞き取れなかったが、唇がそう動いた。

沙枝は俺にぎゅっと抱きついてきた。

返してやるのが礼儀だろう。

ヘリのドアが開いて、中から知らない大人が何人か出てきた。

皆同じ格好をしている。

そのうちの一人が、俺が握ったままの銃を回収しに来た。

他の彼らは沙枝を連れて、ヘリの中に入った。

「ありがとう、アキ」

それが、最後の言葉だった。

大人たちは、谷崎の身体と、礼の身体を回収して行った。

唯は、一行の最後尾にヘリに入る。

ヘリに乗るとき、振り向いて俺に会釈してきたので、俺は手を振り返してやった。

全員がヘリに乗り込むと、ヘリは一気に上昇して行き、空の彼方へ

と消えていった。

俺はへりが見えなくなるまで、手を振り続けた。
様々な物に別れを告げた。

屋上には、俺以外何も残されていない。

西からの夕日が眩しく、思わず目を細めた。

5 (後書き)

次はエピソードです

6 (前書き)

エピソードになります。

エピソード

あれ以来、俺の周りから何かが抜け落ちたような、物足りない日々が何日か続いた。

夏休みだつていうのに、勉強にまるで身が入らない。そんな日々だ。でも、閉鎖的になった訳じゃない。

それに、あの事件がただの思い出になったわけでもない。

俺は、あの事件であらゆる物を失い、あらゆる物を得た。

友達が信じられなくなったとか、そんなことは断じてない。

中村は最後まで沙枝の友達だったろうし、谷崎も最後まで俺の親友だった。

もちろん俺だつて、「出会わなければよかった」なんてことは考えていない。

もう俺の手元には、その身体のスの一本も残されちゃいないが、それよりも大事なものが残ったと思う。

それが何なのかは、今の俺にはよく分からない。

しかし、それはとても価値のあるものだということは確かだ。

俺はそう信じたい。

沙枝の未来が見える能力だつて、前は欲しがってさえいたが、今の俺にはいらぬ。

無駄な能力というか、見えてしまったら人生、面白くないだろう。見たくない未来を見ることにもなるかもしれない。

そういう意味では、沙枝は不運だと思う。

どうして改造されたのが沙枝だったのかは、俺には知る由もない。

しかし、沙枝はこれから、その不運を乗り越えるように生きていくだろう。

今どこで沙枝が何をしているのかは分からないし、沙枝もきっと、俺がこうして自分のことを考えているとは思えないだろう。

もしかしたら、俺のことを忘れているかもしれない。

もしそうなら、俺はそれでいいと思う。

無かったことにはならないとしても、それで沙枝が楽になるのなら、俺はそれでいい。

俺は一人になった訳じゃない。

今は別の友達と仲良くやってる。

多分、そう谷崎や沙枝は望んでいるだろうから。

沙枝があの時言った言葉もしっかり覚えてる。

あのバカみたいに明るい笑顔で、

「大好きだったよ」

と。

6（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2888m/>

タイム・ガール

2010年10月14日15時21分発行